

3学期始業式の講話(新しい年を迎えるにあたり)

新しい年を迎えるにあたり

令和8年 3学期始業式

3学期のはじめ、新しい年のはじめにあたり今回も紙芝居でお話しします。

夢なき者に理想なし、  
理想なき者に計画なし、  
計画なき者に実行なし、  
実行なき者に成功なし。

故に、夢なき者に成功なし  
吉田松陰

初めに紹介するのは、幕末の思想家「吉田松陰」の言葉。

これから一年を始めるにあたって、「夢」に向かって行動することの大切さを表現した有名な言葉です。

松下村塾 “奇跡の学校”  
1年と1カ月、79人の若者に

「お前は何のために生まれてきたのか」  
「お前の生まれてきた役割は何か」

「使命」



吉田松陰は、長州の萩で「松下村塾」という学校を開いて、たった1年と1カ月の間で、79人の若者にいろいろなことを教えました。

驚きなのは、その門下生からは、伊藤博文や山県有朋といったのちの総理大臣をはじめ、数多くの歴史的偉人を輩出したことです。

別に優秀な人たちを集めたわけではありません。武士の子供から、商人や農民の子供まで…。だから、「奇跡の学校」と呼ばれているそうです。いったい何を教えたんだろうと気になりますね。

松陰が教えたのは、

「お前は何のために生まれてきたのか」

「お前の生まれてきた役割は何か」

これを問いつけたのです。つまり、世の中に生まれてきた「使命」を問うたのです。

どうすれば自分の役割、つまり使命がわかるんですか？

そんな門下生に対して、松陰先生はこう言います。

「至誠を貫きなさい」

至誠とは、普段やらなければならないことを真剣に本気で、誠意をもってやることだ、と。

皆さんであれば、

「挨拶」はしっかりすることだとか、

人に対して誠実に接することだとか、

「勉強」をごまかさずに一生懸命することか

そんな日常のあたり前を本気ですることです。

そうすれば、そのうち、自分の人生における役割に気づくことができる

自分の使命はどうすればわかる？

「至誠」を貫く

やるべきあたり前のことを  
絶対に手を抜かないで、  
真剣に本気で、誠意をもってやること

そうすればいつか自分の役割が必ずわかる



自らのミッション  
(使命)を見つける

中村文昭さん（有限会社クロフネカンパニー代表取締役）のお話

「『頼まれごととは試されごと』  
人から何か頼まれたら、  
自分がいま、試されているんだと思って、  
頼んだ人の予測を常に上回る仕事をしろ」

4カ月後にバーを開店する指示  
↓  
修行で、あるホテルの厨房へ

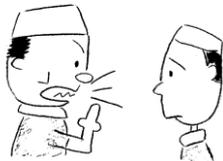


「師匠、あそこはダメです。  
1週間経っても、皿洗いかささせてもらえない。  
このままあそこにもダメだと思うんです。  
他のホテルかレストランに変わったほうがいいです」

「お前はいつもそうだ。  
いつも自分の都合に合わないと、  
すぐに場所を変えようとする。」

その場所で、自分の思いが叶うまで努力するから  
お前の夢が叶うんだ」

「お前、その皿洗いで、  
日本一を目指したか？」



今日は、そうしたテーマで一つだけお話をします。  
「ココロの授業」という本の中に紹介されている  
中村さんという起業家の話です。

彼は、「『頼まれごととは試されごと』 人から何か頼まれたら、自分がいま、試されているんだと思って、全力で取り組み。しかも、頼んだ人の予測を常に上回る仕事をしろ」と言っています。

実は彼、もともと夢も何もなく、とりあえず東京に来ていたんですが、そのとき人生を変える出会いがあって、その人を師匠として素直に教えを乞い、実践していったそうです。

この中村さんはいろいろな講演をされていて面白い話がいっぱいあるのですが、今日は一つだけになります。

ある時、師匠から4か月後に六本木でバーをオープンしたいので、「お前、バーテンダーをやれ」と言ったんです。

中村さんはまだ東京に出てきたばかりの21歳で、もちろん経験はありません。「そんなの無理です」という彼に師匠は、「まだ4か月もあるじゃないか。なぜ精一杯やってみないのか」と説教され、次の日から修行に出ます。

師匠の知り合いのいるホテルの厨房です。ウェイターか何かかと思ったら、いきなり長靴とでっかいエプロンをつけて「皿洗い」です。そして1週間経っても、ひたすら皿洗いの日々。このままやっても4か月後にバーはオープンできないと思って師匠のところに行きます。

「師匠、あそこはダメです。ほかのホテルかレストランに変わったほうがいいです。しかも、あのホテルは、厨房の雰囲気が悪くて、殺伐としていて、誰もこの1週間声もかけてくれないんです」と訴えます。

師匠は「違う」と言います。

「お前はいつもそうだ。いつも自分の都合に合わない、すぐに場所を変えようとする。そうじゃない。場所を変えて、場所を変えて、職種を変えて、場所を変えてね、そんなことをしていても、お前の思いを叶えてくれる場所なんて一生見つからない。場所を変えるんじゃないんだ。その場所で、自分の思いが叶うまで努力するから、お前の思いが叶うんだ」

さらに師匠はこう言うんです。

「お前、その皿洗いを一生懸命やったのか？」

「はい、僕、やりましたよ」と。

さらに師匠は「じゃあ、その皿洗い、日本一を目指したか？」

中村さんは一生懸命やったけど、「日本一」と言われると「いや…」

「それが甘い！」と、小さい目覚まし時計を中村さんに渡して、明日から皿洗いの時に秒針を見ながら日本一の皿洗いをやれ。稲妻のような皿洗いを」と言いました。

中村さん、素直なんですね。

次の日から、素直に  
“稲妻”の皿洗いを



最初は馬鹿にしていた周囲  
の料理人たちも味方に…

やがて料理長の命令で  
先輩たちをぶち抜いてカウンターの仕事に

次の日から、それをやるんです。  
もう稲妻なので、ものすごいスピードでガーッとやるんです。周りからみたら異常ですよ。

周りの料理人たちも、最初のころは「バカじゃないの〜？」なんて笑いながらからかうんです。でも、師匠の言いつけを守った中村さんは、それを続けるんです。すると、だんだん周りの人の言うことが変わってくるんです。

「俺ら、あいつがやっていること真似できるか？あいつ日本一の皿洗いを目指すって言っているけど、もしかしたら大事な何かを教えてくれているんじゃないか…」って尊敬のまなざしに変わってきたんです。周りの人たちからかけられる声も変わってきて、いつの間にか味方が増えていったんです。

やがて誰からも恐れられている料理長かの目にとまって、ホテルのラウンジのカウンターの仕事に抜擢されます。

社員や先輩たちをぶち抜いての抜擢なので、文句が出たっておかしくない状況ですが、「お前に抜かれるならいいよ」と誰一人文句を言うどころか、応援してくれたそうです。

バーがオープンした初日



料理長や職人たちが  
「お前のことをみんなで応援する」と駆けつける

目の前のことを本気でやることで、  
たくさんの人に与え、それが返ってくる

そして修行して4か月後、いよいよバーがオープンした初日、初めて来てくれたお客さんは料理長とお酒のことを教えてくれた主任さんでした。

うちの若い連中、「お前のことをみんなで応援する」って言っている。入れ代わり立ち代わり、今日みたいにおつまみをもってきてやる。そのうちおつまみぐらい自分で作れるようになれ」と、盛り付け方から何から丁寧に教えてくれたそうです。

中村さんはその時、うれしくてうれしくて、もうワンワン泣きながら抱き着いたそうです。

中村さんは、目の前のことを本気でやることで、たくさんの人たちを味方にして、そしてその結果が、ちゃんと返ってきているんですね。

あたり前のことを  
本気で、誠意をもって取り組むことで  
運命が拓かれる

To Do Goodよりも To Be Goodが大切  
ケインズ (経済学者)

「やり方」よりも「あり方」が大切  
比田井 和孝 (ウエジヨビ副校長)

夢もやりたいこともなかった中村さんが、目の前のことを一生懸命やることによって、いつの間にか役割を与えられていたんです。

気づいたでしょうか？

この話、どうやったら夢であるバーテンダーになれたのか、という話ではなかったですよ。

私たちはついつい効率の良い「やり方」ばかり追いかけてしまいますが、実は人として大切な「あり方」こそが追求すべきもので、その先に人に喜んでもらう「使命」が見えてくるということです。

高校生活の中には、様々な教科の勉強を始め、部活動、行事、そして探究といった自分を知る機会がたくさんあります。日々の人間関係もそう。誠意をもって全力で取り組む中で、きっと自分自身の生きる道が見つかります。そして受験勉強からも大切な何かを見つけることができるはずです。

これから始まる2026年

皆さんの人生において  
“分岐点”となる充実した毎日に

これから始まる2026年が、皆さんの人生にとって、価値ある“分岐点”となるよう、一日一日、一瞬一瞬を大切に、「自分のあり方」を磨いていく年になることを願って、始業式の訓示とします。